



Title	2010年度トウルファン班調査記録
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	東ユーラシア出土文献研究通信. 2011, p. 7-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88464
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2010 年度トゥルフアン班調査記録

荒 川 正 晴

今年度、トゥルフアン班は、8月1日～8月7日にかけて、荒川正晴（大阪大学）・白須淨眞（広島大学）・高橋照彦（大阪大学）が、トゥルフアンで調査に従事した。調査にあたっては、これまでも密接に交流してきた吐魯番地区文物局局長・吐魯番博物館館長の李肖氏の全面的なサポートを得た。ちなみに同氏は、吐魯番学研究院常務副院長の職にも就かされている。

以下、簡略ながら今回の行動記録を書き留めておく。

8月1日（日）

荒川・白須・高橋は、関空発 CA162 便で北京へ。そのまま飛行機を乗り継いで、CA1297 便でウルムチへ。空港では、今回通訳を担当してくれる白玉冬さんが出迎えてくれる。李肖氏が手配するホテルへ直行。夕食後、今回の調査に関して、メンバー間で打ち合わせをする。

8月2日（月）

10時にホテルを出発して、一路、トゥルフアンへ。高速道路のお陰で、12時50分にはトゥルフアン市内に到着。今回の宿となるホテル（吐哈石油大厦）にチェックイン後、李肖氏と会食。食事後、李肖氏と今回の調査内容について経費の件も含めて打ち合わせを行う。16時半、博物館の地下にある収蔵庫に隣接する部屋で、文書を閲覧。具体的な調査内容については後掲の報告を参照。19時半、閲覧終了。その後、4階に行き、トユク石窟から今年新たに出土した仏典および世俗文書の断片を参観。まだ新聞紙に包まれて一時的に保管されている状態であり、目下、整理中とのこと。漢文だけでなく、断片ながら多くの胡語文献（サンスクリット・ウイグル・トカラなど）が出土する。20時、吐魯番地区書記および吐魯番学研究院の院長、北京大学の羅新さん、トルコのアタテュルク大学の Cengiz ALYILMAZ さんと宴会。羅さんと Cengiz さんは、新出のルーン文字・漢文のバイリンガル碑文を調査中とのこと。

8月3日（火）

10時15分頃より午前中一杯、アスターナ古墓群文物管理所の副所長、カハールカ哈尔さんの案内で、アスターナ古墳群を参観。

・張氏一族の塋域内（501号<張懷寂>、230号<張礼臣>、505号<張定和>、224号、510

号, 506号<張無佻>), および塋域外(519号<張隆悦, 妻麴氏>, 520号<張碑兒>, 521号, 522号<張武忠, 妻高氏>)を参観。

白須氏より, 塋域内と塋域外とでは, 墓道の位置が逆向き(塋域内は東向き, 塋域外は西向き)になることに注意すべき旨, 指摘あり。塋域の外側に墳墓が造られた張隆悦・張碑兒・張武忠らは, 張氏一族の塋域内に何故に造営できなかつたか, またこのことと墓道方向が塋域内とは逆になっていることとは関係があるのか, 今後検討すべき課題となる。

その後, 12時に台蔵塔へ(三堡郷高昌城西北, 東経 $89^{\circ} 31' 36''$ /北緯 $42^{\circ} 52' 03''$)。

- ・台蔵塔の創建年代やその性格に関連しては, 今のところ明確な結論は出されていないが, そのことに関連して注目されるのは, 同塔遺址の基層に五胡十六国時代の墳墓(東に向けて墓道)が存在することである。つまり五胡十六国時期には墓地であった所を壊して, その上に台蔵塔を創建したことが推測できよう。また台蔵塔上部の洞窟内から, 暦関係の文書が発見されている(Cf. 陳昊「吐魯番臺蔵塔新出唐代曆日文书研究」栄新江・李肖・孟憲実主編『新獲吐魯番出土文献研究論集』[以下, 『新獲論集』と略称] 中国人民大学出版社, 2010, pp.505-520《初出『敦煌吐魯番研究』10, 2007》)。

昼食後, バダム村の村長さんの自宅で休息後, 16時10分, バダム巴達木墓地(二堡郷)へ。発掘簡報[吐魯番地区文物局「吐魯番巴達木墓地清理簡報」『吐魯番研究』2006-1, pp.1-58; 同「新疆吐魯番巴達木墓地発掘簡報」『考古』2006-12, pp.47-72]。墓地からは, 北側近くに火焰山が迫っているように見える。また簡報に付いている地図でも, 本墓地が高昌故城北のアスターナ・カラホージャ古墳群より遙かに北側にあるように記されているが, 実は高昌故城の東北方近くに位置している。正確な墓地の位置については, 後掲の地図①を参照のこと。

参観後, すぐ南にある古城址らしき遺跡に行く。

- ・安堅買亥来古城(二堡郷, 東経 $89^{\circ} 34' 1''$ /北緯 $42^{\circ} 52' 21''$)か?ただし, 新疆维吾尔自治区文物普查辦公室・吐魯番地区文物普查隊は, 本古城址の年代を清代と定めている。

17時30分, 近年, 新たに発掘された605号, 408号墓を参観。南北に並んで造営。どちらも墓道は東向き。詳しくは, 後掲の白須報告参照。

18時30分, 烏江不拉克古城遺址(勝金郷, ベゼクリク石窟西北2km余)を参観。『新疆文物』1988-3, p.46に古城址のプランが掲載されている。本城址の東南約200mに烏江不拉克古墓群が, また南方約900mに伯西哈石窟が拡がっている。

8月4日(水)

10時45分以降, 午前中一杯, 洋海古墓群(峪溝郷洋海夏村西北2.5km)を参観。一面に墳

墓が点在する広大な墓地であるが、今回は洋海・トユク文管所所長の外力買依提氏の案内で、97TSYM1号墓を参観。4号墓からは、「高昌郡高寧県都郷安邑里の民、趙貸」が冥界へ提出した訴訟文書が出土している（2006TSYIM4:1/ Cf. 游自勇「吐魯番新出《冥訟文書》與中古前期的冥界觀念」『新獲論集』, pp.45-70《初出『中華文史論叢』2007-4》）。このことから、洋海古墓群は、高寧県都郷（高寧城）に居住する民の奥津城となっていたことがうかがえる。また後に述べるように、火焰山以南のオアシス城邑は、その北側に墓域を造営することから見て、おそらく墓地の南に広がる洋海 Yangkhe のオアシス（トユク石窟のある溪谷より南流する河川によって開かれたオアシス、後掲地図②参照）が、高寧城であったと判断できる。ただし参観した1号墓からは、同時に「威神城主、張祖」（2006TSYM1:5）の木牌が出土している。威神城は高寧城の東方に隣接していたオアシス（Lükchüng ルクチュンと Sirkip シルクップの間に位置したオアシスカ/ Cf. 荒川正晴「麴氏高昌国における郡県制の性格をめぐって—主としてトゥルファン出土資料による—」『史学雑誌』1986-3, p.40, p.68 注(16)；榮新江「吐魯番新出送使文書與闐氏高昌王国的郡県城鎮」『新獲論集』p.149）であったので、唐西州時代の城主問題とも関わり、この木牌を如何に解釈するかは、今後の課題となる。なお城主問題については、徐暢「敦煌吐魯番出土文献所見唐代“城主”新議」孟憲実・榮新江・李肖主編『秩序與生活：中古時期的吐魯番社会』中国人民大学出版社, 2011, pp.124-144《初出『西域研究』2008-1》を参照。参観後、再度、高昌二堡郷を車でゆっくり回ってもらい、昨日参観したバダム巴達木墓地の位置を確認した。

13時26分、阿瓦提仏塔（三堡郷、東経 89° 27' /北緯 42° 52' 42"）を参観。高昌故城の西方に位置する。文革のころには、20mを越す大塔であったと言うが、現在ではかなり崩壊している。時代は、唐代の可能性があるという。

13時50分、トゥルファン市のホテルへ一端戻る。

17時08分。安楽故城（葡萄郷禾乃木加依村、東経 89° 12' 21" /北緯 42° 55' 56"）へ。残された城壁部分から見ると、城邑としての規模は大きい。西隣に有名な蘇公塔あり。

18時30分、南平城址（拉木伯公相古城、恰特喀勒郷拉木伯公相村、東経 89° 12' 49" /北緯 42° 50' 31"）、とくに西の城壁部分を参観。

・麴氏高昌国の南平郡、唐西州時代の天山県南平郷の城址。黄文弼のプランを確認。

交河故城まで30kmほどであるが、西州時代には交河県の所管ではなく、天山県の所管となっている。当時の交通路、とくに西州高昌県から交河県を經由しないで天山県へと延びる公道との関係を考えるべきであろう。

20時37分、かなり道に迷ったが、ムナール木納爾墓地（吐魯番市蘇公塔、安楽故城東北2km）を参観。発掘簡報「吐魯番地区文物局「新疆吐魯番地区木納爾墓地的發掘」『考古』2006-12, pp.27-46」。本墓地1号台地2号墓より「顯慶元年(656)二月十六日宋武歆墓誌」（2004TMM102:12）が出土。本墓誌には、「葬於永安城北」とあり、本墓地が**永安城**の奥

津城となっていたことが知られる [Cf. 高丹丹「吐魯番出土《某氏族譜》与高昌王国的家族聯姻—以宋氏家族為例」『西域研究』2007-4, pp.88-89]。これまで永安城の正確な位置は未確定であったが [Cf. 荒川正晴「麹氏高昌国における郡県制の性格をめぐって—主としてトゥルファン出土資料による—」『史学雑誌』1986-3, p.40, p.68 注(16)], このことから、永安城が安樂城の東方に隣接した城邑であったことが明らかになる。

8月5日(木)

午前中、午後と一日中、吐魯番博物館において文書調査。調査終了後、吐魯番博物館の展示室を参観。展示室は、以下に示すように3つの陳列室から成り、そのうち1つの陳列室は、7つのセクションで構成されている。

・吐魯番地区通史陳列室

第一单元 早期人類的活動

第二单元 姑師文化的發現

第三单元 西域都護統轄下の車師

第四单元 高昌郡及麹氏高昌国

第五单元 唐西州經濟文化時繁榮

第六单元 回鶻文化的發展

第七单元 清代的吐魯番郡王

・巨犀化石陳列室

・出土文書金銀幣陳列室

きわめて特徴的なのは、西州ウイグル国時代以降の陳列が、大変に手薄なことである。とくに明代以降の遺物はまったく展示されていない。その代わりに、漢人が支配した時代およびそれ以前の車師時代に関する陳列は、とても充実している。これは、政治的な理由というよりも、吐魯番博物館・吐魯番学研究院のスタッフ構成と密接に関わるものである。

8月6日(金)

午前中、新華書店などを巡る。午後は、博物館の陳列室を再訪。夜は最後の宴会。

8月7日(土)

9時05分、トゥルファン出発、11時45分、ウルムチ市内到着。

15時55分、ウルムチ発 CA1902 便で北京へ。北京泊。

8月8日(日)

白須・高橋は、16時北京発 CA161 便で関空へ。

荒川は、北京に 10 日（火）まで滞在し、11 日（水）にハラホト班と合流。

（文書閲覧）

申請書に従い、吐魯番学研究院（博物館）において 1975 年～1989 年に出土したトゥルファン文書の実見調査を行った。既に柳洪亮氏により、その図版と録文 [『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社、1997] が公表されているが、積読が困難なほど図版が不鮮明なうえに移録ミスも多く、その修正版を作成中である。

今年度、調査したのは、唐西州時代に造営された諸墳墓より出土した文書である。文書番号は、以下の通りである。

86TAM360:1 (『新出吐魯番文書及其研究』 p.94)

86TAM360:3-1 (同上, p.95)

86TAM360:2 (同上, p.96)

86TAM360:3-4・5・6 (同上, pp.97-99)

86TAM360:3-7 (同上, pp.100-101)

86TAM360:3-3 (同上, p.105)

86TAM384:4-1,5-1, 5-5 (同上, p.108)

86TAM384:4-2 (同上, p.109)

86TAM384:5-2 (同上, p.110)

86TAM384:5-4 (同上, p.111)

86TAM384:5-3 (同上, p.112)

86TAM391:2 (同上, p.114)

86TAM389:21-1 (同上, p.81)

86TAM389:22-3 (同上, p.82)

86TAM389:22-2a, 21-3a (同上, p.83)

86TAM389:22-2b, 21-3b (同上, p.85)

86TAM389:22-4 (同上, p.86)

86TAM389:21-2a (同上, p.87)

86TAM389:22-5a (同上, p.88)

86TAM389:21-4 (同上, p.89)

このほか、別枠で以下の文書も実見した。

2006TZJI:132,133,116,100,101,142,102,95,147etc.

「龍朔二・三年（662・663）西州都督府案卷為安稽哥邏祿部落事」『新獲』下，pp. 309-325.

調査内容については、後掲の「文書調査報告」を参照されたい。

（遺跡調査）

文書調査とは別に、行動記録に示したとおり、今年度は以下のような遺跡を参観した。

1. ア斯塔那（アスターナ）古墓群
2. 台藏塔
3. 巴達木墓地
4. 安堅買亥来古城
5. 洋海古墓群
6. 阿瓦提仏塔
7. 安楽故城
8. 木納爾墓地
9. 拉木伯公相古城
10. 烏江不拉克古城遺址

- ・今回の調査では、哈拉和卓（カラホージャ）古墓群および沙依布隆古城（二堡郷，東経 89° 35′ 20″ / 北緯 42° 50′ 30″）も参観を希望していたが、結局、参観することはかなわなかった。両遺跡の現状に関する情報についても、吐魯番地区文物局および博物館関係者から入手することはできなかった。哈拉和卓古墓群については、これがア斯塔那古墓群とは違い、発掘を終え墳墓が埋め戻された後に、墓地としてそのまま保存されているわけではなく、現在ではウイグル農民の村がその上にできているものと考えられる。また沙依布隆古城は、高昌故城の東に築かれていたと見られるが、これも現在ではほとんど沙に埋まっている可能性は高い。

（参考資料）

西村陽子・鈴木桂・張永兵「吐魯番地区古遺址分布考——以麴氏高昌国，唐西州時期的古遺址的空間把握為中心」『吐魯番学研究』2009-2, pp.28-55.

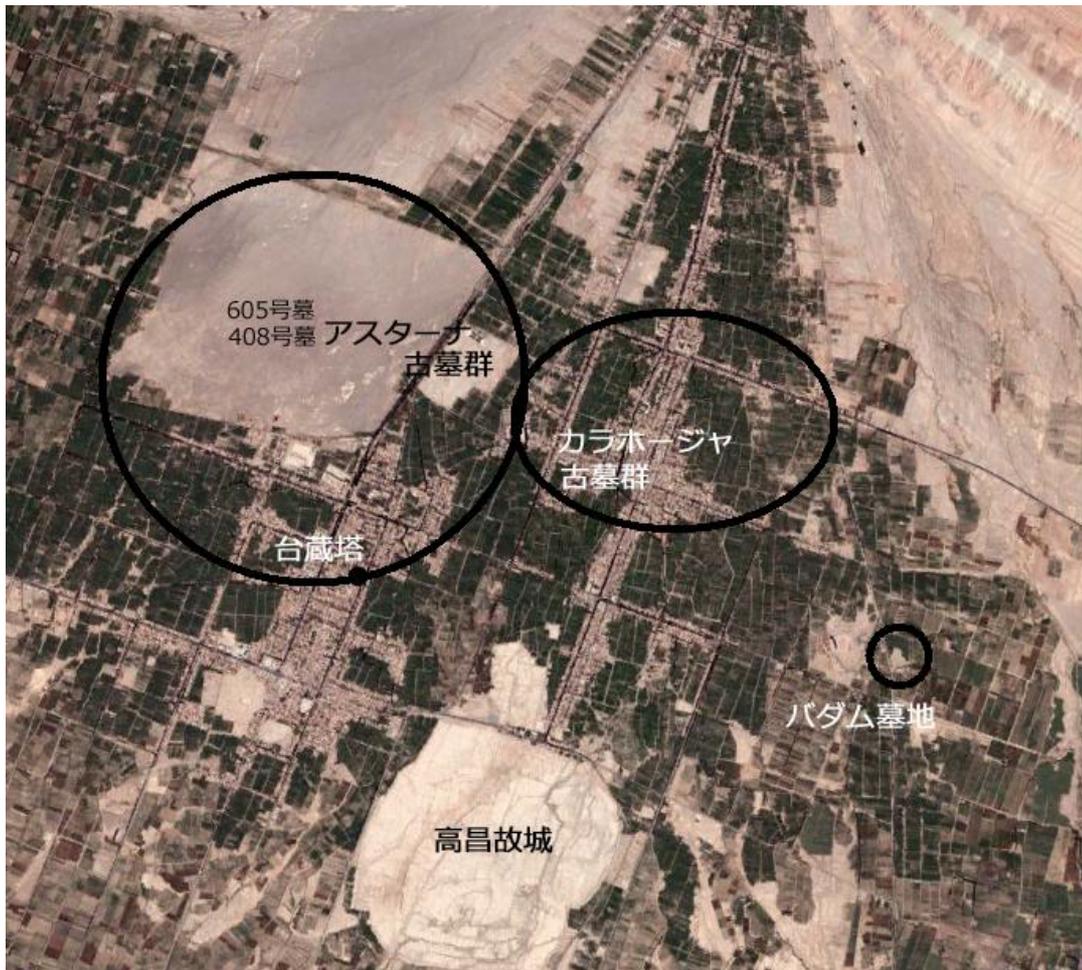
新疆维吾尔自治区文物普查辦公室・吐魯番地区文物普查隊「吐魯番地区文物普查資料」『新疆文物』1988-3, pp.1-84.

今回、いくつかの理由に基づいて、これらの遺跡をピックアップした。一つは、文書が

出土した場となる古墳墓の遺跡調査を行い、それぞれの墳墓の分布状況と、埋葬者が居住したオアシス都市との位置関係を確認するためである。古墳墓としては、リストに示したように、①阿斯塔那（アスターナ）・哈拉和卓（カラホージャ）・巴達木（バダム）、②洋海（ヤンヘ）、③木納爾（ムナール）の古墓群を選定した。

まず①の三墳墓群は、何れも高昌故城の北側東西に広く分布する古墓群である。このうち、アスターナとカラホージャ古墓群については、前世紀初頭以来、現在にいたるまでに多くの探検隊や考古隊が発掘に従事しており、その存在はよく知られている。これに対して、バダム墓地は近年新たに見つかったもので、その認知度はまだ低い。当墓地に関する報告論文（吐魯番地区文物局「吐魯番巴達木墓地清理簡報」『吐魯番研究』2006-1, p.1）では、その墓地の位置について「吐魯番市二堡郷巴達木村東，北距哈拉和卓墓地 1 公里，南距高昌故城 4 公里，西距阿斯塔那墓地 3.5 公里，東距吐峪溝郷 11 公里」とやや詳細に紹介し、簡略ながら地図も掲載しているが、専門研究者においてさえも、その正確な位置を認識しているかどうかは疑わしい。

今回の参観では、アスターナおよびカラホージャ古墓群とバダム墓地との位置関係を確認した。簡単にそれを地図上に示すと、以下のようである。



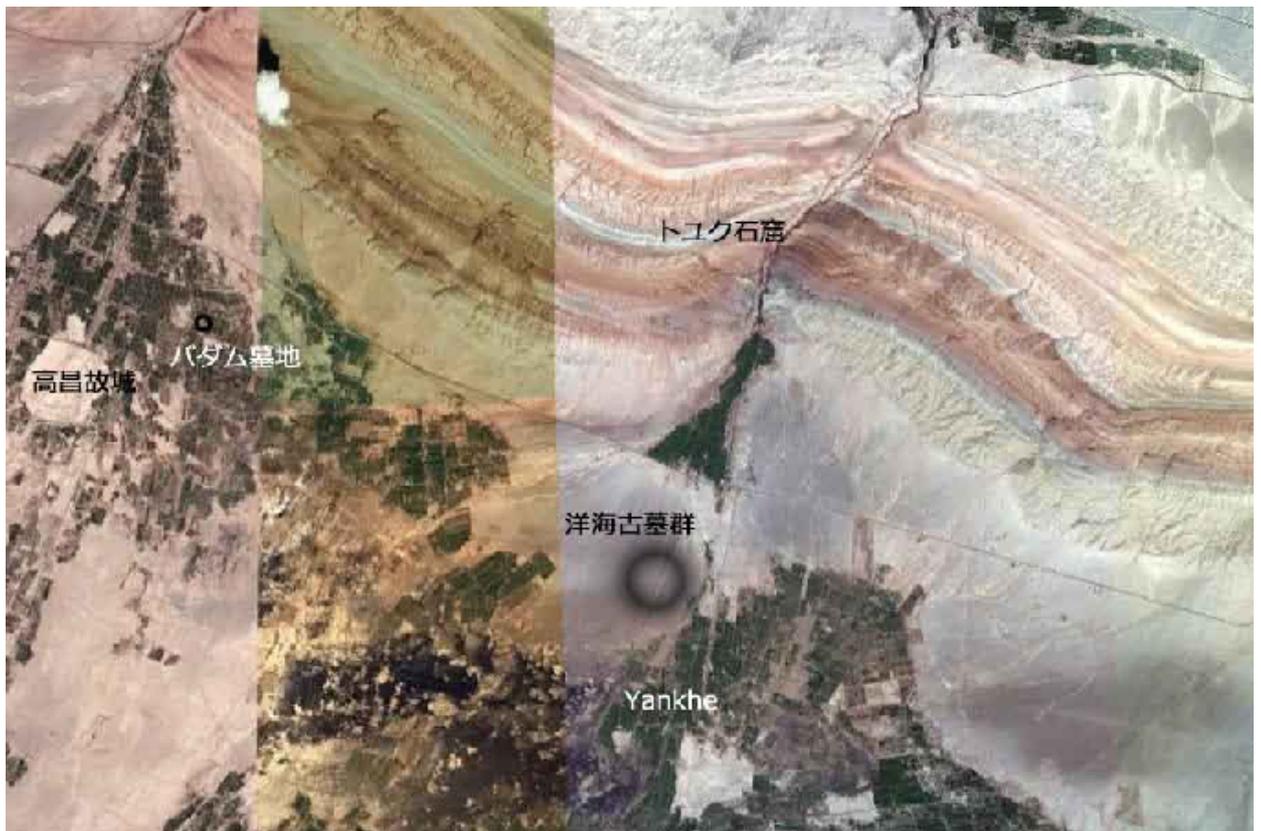
地図①

これから見ると、前掲の三つのうち、バダム墓地がアスターナ・カラホージャ古墓群よりも南に位置し、高昌故城の東北方向に存在していたことが知られる。ちなみに高昌故城の東方では、黄文弼が高昌故城の東方5里ほどの「伯什柯阿克 Bēsh-kāwuk」で墳墓群を発掘しており、ここから「ウイグル文字」と人型の木俑が出土したらしいことから、彼はここをかつてのウイグル人の墓地と見ている〔黄文弼、遺著・黄烈、整理『黄文弼蒙新考察日記（1927-1930）』文物出版社、1990、p.528〕。また同じく故城の東方には、グリェンヴェーデルによると「小ストゥーパ群」とその北方に「大ストゥーパ群」があり、これらはともに西ウイグル時代のネクロポリス（大墓地）であったという（Cf. 森安孝夫『ウイグル=マニ教史の研究』『大阪大学文学部紀要』31/32 合併号全冊、1991）。

これに対して、アスターナ・カラホージャ古墳は、一連の広がりをもった古墓群であった可能性があり、本来、両者は墓地としての区別は無かったものと見られる。またこれら古墓群が、高昌故城に居住した人々（基本的には土人層、西州時代以降は新興庶人層も墳墓を造営）の奥津城であったことも疑いない。それに対して、バダム墓地は、どうであっ

たか。この点については、後掲の「(今後の課題メモ) 問題2」を参照。

次に②の洋海古墓群は、高昌故城東方、吐峪溝口の西南に位置する古墓群であり、その南には Yangkhe のオアシスが広がる。この Yangkhe には、高昌郡時代の高寧県、麴氏高昌国時代の高寧城が置かれ、唐西州時期には柳中県高寧郷が置かれていた。洋海古墓群は、先に述べたように、まさにこの高寧城の奥津城となっていた。



地図②

また③の木納爾墳墓群は、トゥルファン市内の東側に位置する古墓群であり、その南西には安楽故城（英沙古城 Yangi-shahr, 吐魯番市東部の蘇公塔の東南）が存在している。ここは麴氏高昌国時代に安楽県が置かれ、西州時期になると交河県管下の安楽郷になっている。ただし本墳墓群は、先にも述べたように、同群墳墓出土の前掲墓誌（「顕慶元年(656)二月十六日宋武歆墓誌」2004TMM102:12）に「葬於永安城北」と明記されていることから、この永安城オアシスに住む人々の奥津城となっていた。以上のことは、同墳墓より出土した文書を分析してゆくうえで、常に念頭においておくべき重要な点である。文書の内容を問わず、出土してきた文書がどうしてその墳墓に埋納するにいたったのか明確にしておくことは、その文書の性格を見きわめてゆく上でも欠かせないポイントとなる。

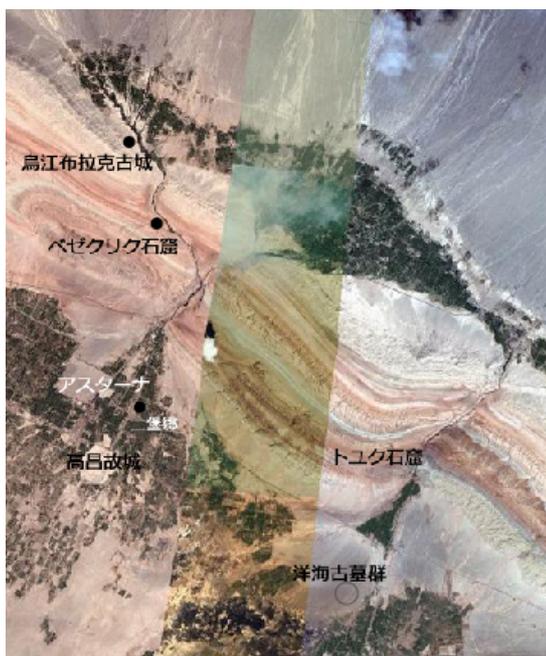
またこの墳墓の参観では、さらに別に確認したい点があった。それは、非日常的な空間である墳墓が、何故にそこに造営されたのか、その立地条件を探ることであった。既にこ

の点については、敦煌を例に取り、菊池英夫氏により一つの提言がなされている。（「隋・唐王朝支配期の河西と敦煌」榎一雄（編）『講座敦煌 2 敦煌の歴史』大東出版社、1980、p176）。同氏によれば、沙州敦煌県城と莫高窟とが、一体をなしながらも又一定の距離を保って存続するとともに、その県城址と石窟との中間に、晋（五胡）代以降の相当の墓域が広がっていたことに注意を促す。そして、これはオアシス城市の生活空間と、死者を葬る黄泉の空間を隔てて、仏菩薩の讃仰と解脱の修行、供養と鎮魂のための空間が開かれていたとする。オアシスの地における都城を中心とした世俗的な生活空間と、世俗や現世を越えた非生活空間の広がり方には一定の規則性があるというわけである。さらに、これはトゥルファンの高昌故城とその北側のアスターナ古墓群、そしてさらに北方に開鑿された勝金口・ベゼクリク・ムルトウック石窟にも同様な関係が見られると指摘されている。今回は、この点についても確認した。

①～③の北側には、キジル・ターグ（火焰山）が東西に延びているが、ボグド・オラ連山の雪解け水を源流とするいくつかの河川が、この山を刻んで溪谷を作り、さらにその河川が南流して、各オアシスに水を供給している。菊池氏も触れているように、①では、高昌故城の北側に、アスターナ古墓群などが広がり、さらにその北側の溪谷に、有名なセンギム・ベゼクリク・ムルトウックの諸石窟が開かれている。また②でも、同じように洋海オアシスの北側に洋海古墓群が広がり、さらにその北側の溪谷にトユク石窟がある。さらに③でも、永安城（安楽城と近接）の北側に木納爾古墓群が広がり、さらにその北側にある溪谷に Buluyuk 葡萄溝石窟が存在している。

これらのことから、敦煌オアシスと似たような配置で古墓群を築いていたことが知られる。つまり、オアシスと溪谷の石窟との間に古墓地を築造していたのである。

この構造は、キジル・ターグ（火焰山）の北側に存在したオアシスにあっても、共通していたようで、今回、調査した烏江不拉克古城遺址は、寧戎郷のオアシスとされるが、これに付設された古墓群は、その南に広がっていた。そしてその南に、ベゼクリク石窟が存在しているのである。ここでも、オアシス城邑と石窟の間に、古墓群が広がる。



地図③

この調査を通じて、出土文書の内容に反映される空間的な広がりを理解するとともに、トゥルファンにおける日常空間と非日常空間の広がり方に一定の規則性が存在するらしいことを改めて確認した。

(今後の課題メモ)

課題1. 高昌城の北側の景観復元

高昌国の国都である高昌故城の北側は、墳墓が集中して造られる地区となっているばかりでなく、他の南・東・西側と同様に、渠堰が張り巡らされて田園が広がっていた。ただし、北側で特徴的なのは、他の三面と異なり、城の北5里（約2.5 km）を越えると田園の姿がほとんど見えなくなることである。この点については、とくにアスターナ・カラホージャ古墓群がどのように広がっていたのか、ということを見きわめる必要がある。同じく城北近くに位置する台蔵塔が、先に指摘したように、五胡時代の墓を壊して建造されていたことも、重要なポイントになる。

課題2. 巴達木墓地とソグド人聚落問題

巴達木墓地からは、ソグド人とされる康姓やクチャ人の百姓などの人々の墓誌が出土している。このことから、本墓付近にソグド人の聚落が存在していた可能性が高いこと、またこの聚落が安楽城址から出土した5世紀の『金光明経』巻二の題記に記されている、「高昌城の東の胡天祠」と関係している可能性があることが推測されている（栄新江「西域粟特移民聚落補考」『西域研究』2005-2, pp.10-11；同「新出トゥルファン文書に見えるソグド

と突厥』『環東アジア研究センター年報』1, 2006年, pp.9-10)。

高昌都城のソグド人聚落としてすぐに思い至るのは、「崇化郷」と呼ばれる西州高昌県管下の郷の存在であろう。この郷には多くのソグド人が居住していた。しかしながら、この崇化郷に所属する金貸し屋の左憧憲は、アスターナ古墳群に墳墓を造営しているうえ、本郷には多くの非ソグド人が混住していた。さらに、他郷にも胡人風の名前をもつソグド人は少なからず居住していた。この点、同じく唐代でも敦煌城外東方すぐ近くの城（安城）に隔離されるかたちでソグド人が集住していた敦煌とは、トゥルファンはかなり相違していたと見た方がよい。ただし同時に5世紀における「高昌城の東の胡天祠」の存在は、敦煌と同様に高昌都城外の東近くにソグド人聚落が作られていたことを示唆している。このことはトゥルファンにおいても、当初、敦煌と同じように城東外の城に集住していたものが、次第に高昌都城内に拡散していったと見ることもできよう。

現在のところ、多くのトゥルファン文書を通覧して、高昌城東近くの城として名を確認できるのは、酒泉城だけである。高昌都城の東20里（約9.8 km）ほどに位置する田地を灌漑する水渠（辛渠・瓌渠）が、この酒泉城の管轄下にあったことが確認できる。城東30里（約15 km）にあった田地を灌漑する水渠を管轄することも僅かな例ながら認められるが（後掲授田簿の（一）65TAM42:54）、酒泉城の位置としては、この城東20里を基準にして判断すべきであろう。おそらく高昌都城の外、東方10 km以内に酒泉城はあったものと推測される。ただしバダム墓地を酒泉城の墓域とするには、いささか距離があるように感じられ、この問題は今後の検討課題となろう。

課題3 高寧=Tuyuqか？

先の「高昌城の東の胡天祠」との関係は未だに不明瞭ではあるが、麹氏高昌国時代の「丁谷」で胡天が祀られており、ここにゾロアスター教寺院（祆祠）が存在していたことがうかがえる。この「丁谷」がTuyuqの漢字音写であることは明かであり〔嶋崎昌「高昌国の城邑について」『隋唐時代の東トルキスタン研究』東京大学出版会, 1977, p.120ほか〕、現在のトクク石窟付近に比定できよう。また、私を含めてこれまで多くの研究者は、同時にこのTuyuqをトゥルファンに点在した城邑の一つである「高寧」に比定してきた〔Cf. 荒川正晴「麹氏高昌国における郡県制の性格をめぐって—主としてトゥルファン出土資料による—」『史学雑誌』1986-3, p.40, p.68注(16)〕。ただし、これについては再考の必要があろう。というのは、先に述べたように、高寧城は、洋海古墓の南に広がる洋海Yangkheのオアシスにあったと推定でき、だいたい高昌都城の東30里（約15 km）ほどに位置していた。麹氏高昌国以前の高昌郡時代には、ここに「高寧県」が置かれており、一定程度の規模をもつオアシスであったことがうかがえる。

なお当時の田籍関係の文書を見ると、高昌城東30里～40里（約18 km）に位置する田地を灌漑する水渠になってくると、その多くは「高寧郷」「高寧（城）」もしくは「柳中県界」

の管轄となってくることが知られる。また高寧城（高寧郷）は、唐代西州において酒泉城が高昌県の管轄下にあったのと異なり、柳中県管下の郷城になっているので、高昌城東 30 里あたりが、高昌県と柳中県の境界地帯となっていたのであろう。ちなみに田籍関係の文書には、城東 40 里（約 18 km）に「柳中県界」の、また城東 60 里（約 27 km）に「横截城」管轄の田地が登場するようになる。

参考までに、「高寧」「酒泉」の城邑名が、同じ田籍簿に記録されている例を以下に挙げておく。

「唐西州高昌県授田簿」

(一) 65TAM42 : 54 (『図文』 3, p.128~129)

※『図文』=唐長孺（主編）,中国文物研究所・新疆維吾爾自治區博物館・武漢大學歷史系（編）『吐魯番出土文書』1-4, 文物出版社, 1992-1996.

- 1 神石渠 東道 西阿婆 南史
- 2 畝部田 城東五里左部渠 東王胡 西高相 南渠 北
- 3 右 得史阿伯仁部田六畝 石 充 分 同
- 4 城南五里白地
- 5 一段一畝部田 城西五里神石渠
- 6 段一畝部田 城東五里部渠 東王胡 西高相 南渠 北
- 7 右 得史阿伯仁部田 畝孫祐住充分 同
- 8 拾柒畝
- 9 准折常田二畝城北卅里新興 帳史黃（漢） 東荒 西荒 南竹捉
- 10 右 孫祐住充分 同 觀 M
- 11 段一畝常田 城東卅里高寧渠
- 12 一段三畝常田 城東卅里酒泉
- 13 得 康烏破 陀

(一四) 65TAM42 : 66 (『図文』 3, p. 138)

- 1 里 神石渠 東王 西張伯
- 2 畝部田 城東五里部渠 東石毗 西
- 3 右 翟薩知充分 同
- 4 白滿閣移戸常田拾畝
- 5 一段二畝常田 城東卅里高寧宋渠 東蘇
- 6 城 卅里酒 泉

(一五) 65TAM42 : 67 (『図文』 3, p.138)

〔朱印〕なし

〔備考〕右端に糊跡は明確には認められない。少し変色あり。左端に少し余白あり。切り口がシャープ。朱点なし。『新出』p.94.

一、唐 貞觀十七年（公元六四三年）牒爲翟莫鼻領官牛踏料事（66TAM360:1）

- 1 青稞伍碩，准踏陸碩，給官牛陸頭貳拾日踏料。
- 2 牒：被問前件踏料得以不者，仰 = 並依數
- 3 領得。被問有實，謹牒。
- 4 貞觀十七年四月五日付翟莫鼻領

※2行目 = : 「左革+右韋」（韉と同じ）

2・3行目；「牒」であり、「牒」でないことに注意。

66TAM360:2

〔形態〕上部欠損。冒頭部に紙の貼り継ぎ跡。

〔寸法〕27.0×15.9cm

〔紙〕紙色はchamois□。厚さは中手。中～中下質。1cm/3～4本。漉きムラあり。

〔行数〕5

〔裏面〕紙縫裏面の下方にサインらしき文字の残画あり。

〔朱印〕5.8×5.8cm 「西州都督府之印」ではない。3文字×3行。3行目下2文字「之印」とあり。

〔備考〕2行目下方に2本線が引かれている（埋め草）。『新出』p.96

三、武周 西州都督府牒爲馬連緒十駄，六駄事（66TAM360:2）

1] □司具為馬連緒十駄，六駄事

2] □兵馬連緒十駄，六駄

3] □得柳中縣膝稱得上件至妻翟

4] □是?前庭□衛士若納前件

5 □□□□□

〔後缺〕

66TAM360:3-1

〔形態〕 上下欠損．靴底に二次利用．縫い目の跡あり．

〔寸法〕 22.5×8.7cm

〔紙〕 紙色は chamois□．厚さは中手．中～中下質．1cm/3～4本．

〔行数〕 7

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 5～7行目に 5.5×5.5cm 「西州都督府之印」

〔備考〕 『新出』 p.95

二、武周 長安四年（公元七〇四年）關爲法曹處分事（66TAM360:3-1）

〔前缺〕

- 1] 法曹參軍 = [
- 2] 請處分。牒□ [
- 3] 犯同報者關 [
- 4] 訖去年考後 [
- 5] 狀關，至准狀 [
- 6] 長安四年 □ [
- 7] □ [

〔後缺〕

※1行目 = : 上側に「白」の文字．下側は不明．

66TAM360:3-3

〔形態〕 上下欠損．靴底に二次利用．縫い目の跡あり．

〔寸法〕 22.5×8.7cm

〔紙〕 紙色は chamois□．厚さは中手．中下質．漉きムラあり．漉目の数は不明瞭．

〔行数〕 6

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 なし

〔備考〕 楷書体．5行目と6行目の間は1行分アキ．『新出』 p.105

七、唐勘責功過殘文書 (66TAM360:3-3)

- 1 [] 八口
 - 2 [] 無身 [
 - 3 [] 參軍程待譽 [
 - 4 [] 勘責功過，府宜 [
 - 5 [] 件勘如前，謹 [

 - 6 [] 別將 闕 [
-

66TAM360:3-4

- 〔形態〕 上下欠損。
〔寸法〕 8.5×21.3cm
〔紙〕 紙色は chamois□。中下質。漉きムラあり。1cm/4～5本。
〔行数〕 9
〔裏面〕 裏に文字無し。
〔朱印〕 5cm 四方の官印。印銘は不明ながら，3行か。
〔備考〕 『新出』 p.99

四、武周兵健，成年官，行使等功寔殘文書 (三)

- 1 [] 及戍官等功状，具上 [
- 2 [] 見在及行使物^{□□} [
- 3 [] 除 不 考
- 4 [] ^在 ^翹 ^孟 ^見 ^入 ^都 方亭□ [
- 5 [] 在 合 [

- 6 [] 岐州 岐陽縣 長安□ [
- 7 [] ^其年十一月十七日上□ [
- 8 [] □無賊盜入境 [
- 9 [] □□ = 健^見 [

[後缺]

※2行目「在」は見えにくい。

※9行目 = : 左不明, 右甲 (『新出』 p.99 より)

※9行目 兒 の右下に墨点。

66TAM360:3-5

[形態] 上下欠損。

[寸法] 8.8×27cm

[紙] 紙色は chamois□。中下質。漉きムラあり。1cm/4~5本。中手。

[行数] 10

[裏面] 文字なし

[朱印] 5cm 四方。銘文は不明。1-2行目と10行目(残印)

[備考] 文書の形が3-3, 3-1に近い。2~3行目の間は1行分アキ。『新出』 p.97

四、武周兵健，成年官，行使等功寔残文書 (一)

[前缺]

- 1] 勸? 率兵造城一 [
- 2] 一? 高卅尺已来□ [

- 3] □ 兵州配烽兵四 [
- 4] 勝，納訖。

- 5] 功、出身，具録。
- 6] 月陸品下到? 高昌 太州
- 7] □ 二 一去年 一 [
- 8] 被捺，令高昌於菴 [
- 9] 水 少高 [
- 10] □ 駟 [

[後缺]

※6行目の「月」，7行目の「年」は則天文字

ともに「籍」の文字を記す。『新出』 pp. 100-101

(7a)

〔前缺〕

1] 勲官柱國儀鳳四年四月廿九日□□領紫父師 課戸不輸

2] 天授二年帳後克加從實

(8a)

〔中缺〕

3 □□□□步永業 城東一里 東唐願海 [

4] 常田 城南三里 東郭直住? 西渠 [

(9a)

〔中缺〕

5] 符保 西李洛 南 [

6] 隆女 南主渠 北至鹵

7] 南康延 北孫伯

8] 南張師 北至鹵

9] 喜 南還公 北渠

(10a)

〔中缺〕

10] 南高進侍? 北渠

11 課戸不輸

12] 死

(12a)

〔中缺〕

13 姪女喫戰年參拾陸歳 丁女 []

開 元 二 年 二 月

14] 拾陸歳 [

〔後缺〕

※13 行目「年」は則天文字

※14 行目の欠落部には、「中女」を推補できる。

86TAM384:4-1, 5-1, 5-5

〔形態〕 3断片より成る。被葬者の紙鞋から析出。紙に貼付されている状態。

〔寸法〕 28×20.3 cm

〔紙〕 紙色は chamois□。中～中下質。漉きムラあり。漉目ははっきりしない。中手。

〔行数〕 10

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 なし

〔備考〕 『新出』 p.108.

一、唐 顯慶四年(公元六五九年)史王願住牒爲主帥延 領兵赴州集事 (86TAM384:4-1 5-1 5-5)

1 □□□□□□□□

2□好勿使攪惡者。今以狀牒， 至仰延儁等主帥點檢前件□ []

3 行具、衣常(裳)、弓箭、胡祿、鞍韉、籠頭、馬半(絆)、黄衫、□识，並須具足。

4] □□□馬並差行，限遣主備安(鞍)韉、馬轡、=□

5] □點檢=並?，勿役?攪惡到□ [

6] □欠少。如遇長官?之日，不如法，必即科罪。今以狀

7] 廿五日平旦付延儁効領赴州集。

8 顯慶四年十月廿日史王願住

9 []

10 右果毅都尉張□

※3行目：「鞍」は上「革」+下「安」；「籠」は「龍」?

※4行目「=」：部首は不明，つくりは「龍」

※5行目「=」：上「日」+下「久」

86TAM384:4-2

〔形態〕 紙鞋の底。紙袋に挟まれて保管。

〔寸法〕 27.8×8.5 cm

〔紙〕 紙色は chamois□。1cm/ 7~8 本。薄手。中質。漉きムラなし。

〔行数〕 3

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕なし

〔備考〕86TAM384:5-2 と接合するか要検討。『新出』 p.109.

二、唐某人家書一（86TAM384:4-2）

〔前缺〕

- 1 家並通問訊，其油麻事有□
- 2 少者，急將來，此間立須用。在
- 3 □□□用 將東去□□□

〔後缺〕

86TAM384:5-2

〔形態〕紙鞋の底。紙袋に挟まれて保管。

〔寸法〕20.3×5.5 cm

〔紙〕紙色はchamois□。1cm/7~8本。薄手。中質。漉きムラなし。

〔行数〕2

〔裏面〕裏面に文字跡らしきものあり。

〔朱印〕なし

〔備考〕『新出』 p.110.

三、唐某人家書二（86TAM384:5-2）

〔前缺〕

- 1] □阿婆問訊張生其成 [
- 2] 十月六日訴負? = [

〔後缺〕

※2行目 = : 部首は不明，つくりは「欠」

86TAM384:5-4

〔形態〕2断片より成る。紙鞋のつま先・側面部分（片側の側面は欠落）。

每縣留新任官人守縣，餘並集州，

4 不得限（浪？）有破注。牒至，勘上者。

等四府申，並檢當日不貫此色。

5 當州縣文武官致仕，須知人数及階品。

6 合前庭等四府致仕官摠□□

7 一人前庭府折衝

8 游整將軍守左玉鈴衛前庭府折衝都尉趙午良天授二年五月二日被長

官牒奉 勅致仕還貫訖

〔後缺〕

※3行目の「前件事」は、丸囲みあり。

4行目「勘上」は墨が濃い。

86TAM389: 22-2a,21-3a,22-2b,21-3b

〔形態〕 下端欠損。

〔寸法〕 22-2a+22-2b (19×10.3 cm), 21-3a+21-3b (14.5×10.7)

〔紙〕 紙色はchamois□。1cm/4~5本。中手の薄い方。中質。漉きムラなし。

〔行数〕 22-2a+21-3aは10行，22-2b+21-3bは7行

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 なし

〔備考〕 『新出』 p.83,85.

五、唐 西州戸主牛籍 (86TAM389:22-2a, 21-3a)

〔前缺〕

1 □□□，牛一頭，梨韃，七歳。孫慶祐，牛一頭，〔

2 張阿護，牛一頭，黄韃，八歳。周慶喜 汜〔

3 羊伯善，牛一頭。馮□相〔

一頭黄韃□歳，

- 4 □□聚，牛二頭，一頭赤犍八歳。 范 []
- 5] 駮 犍，六歳。 []
- 6 □慶曾，牛一頭，= 犍，九歳。 []
一頭梨犍十一歳，
- 7 梁善聚，牛二頭，一頭黄 = 十歳。 []
- 8 韓沙弥，牛一頭，梨 十歳 []
赤駮

* 以下，上下反転して記載

- 9] 人別三百廿四日不役。
- 10] 番計番卅日上烽。

※1～5 行目が 86TAM389:22-2a ; 6～10 行目が 86TAM389: 21-3a

※7 行目の「十」は抹消線が見られる。「十」かどうかは不明。

※6・7 行目「=」: =牛+固

※9～10 行目は別筆.

六、唐 和武仕等番役上烽簿 (86TAM389:22-2b, 21-3b)

- 1 □□
- 2] □ 和武仕 令狐元興 入張條舉
已上二人足正月一日上
- 3] 小須
已上二人足二月一日上
- 4] 馮歡悦 入□□相足三月一日上
- 5] □□□入張歡相足四月一日上
- 6] □子
已上二人足四月一日上
- 7] 李武祐，牛一頭，烏犍，六歳。

※1～5 行目が 86TAM389:22-2b ; 6～7 行目 86TAM389:21-3b

86TAM389:21-1

〔前缺〕

- 1 □□郷
- 2 羊伯善車牛 付符鼠堆 趙婆演子車牛□ [
- 3 汜置舉車牛 并夫 李延海車□付 [
- 4 張慶人車牛 并夫 梁善聚車牛□ [

十一、唐殘書稿二 (86TAM389:21-2b)

〔前缺〕

- 1] 實是與?叙?□ [
- 2] □北衙 [] □久更不知委 [

86TAM389:21-4

〔形態〕 上下欠損。鞋先・側面部に二次利用。

〔寸法〕 15.3 × 10.7cm

〔紙〕 紙色は chamois□。 1cm/ 8 本。 中手～薄手。 中下質。 漉きムラあり。

〔行数〕 3

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 なし

〔備考〕 『新出』 p.89

十、唐殘書稿一 (86TAM389:21-4)

- 1 □□如?
實
- 2] 於理存苦, 請上 [
- 3] 請□

86TAM389:22-3

〔形態〕 上端欠損.

〔寸法〕 16.7 × 11.8cm

〔紙〕 紙色は chamois□. 1cm/ 7~8 本. 中手. 中質.

〔行数〕 4

〔裏面〕 文字なし

〔朱印〕 なし

〔備考〕 裏面墨色. 文書冒頭部分に, 貼り継いだ糊跡が残る. 『新出』 p.82.

四、唐 西州車牛簿 (86TAM389:22-3)

〔前缺〕

- 1] 白阿瑠, 牛, = 禿犍, 六歳, 車一乗。 賈善保, 牛一頭, [
2] 汜歡崇, 牛, 烏 = 犍, 八歳, 車一乗。 和安住, 牛, 黄 [
3] 車一乗。任□ [] □ 乘。張願熹 [
4] 隆被? [] 徐沙彌, 牛 [

〔後缺〕

※ 1, 2 行目の「=」: 左「牛」+右「固」

86TAM389:22-4

〔形態〕 上端欠損. 鞋のつま先部分に二次利用.

〔寸法〕 15.4×5.8 cm

〔紙〕 1cm/ 7~8 本. 中手. 中質.

〔行数〕 4

〔裏面〕 文字なし. 墨色全面にあり.

〔朱印〕 なし

〔備考〕 文書冒頭部分に, 貼り継ぎ跡あり. 縫い目跡あり. 86TAM389:22-3, 22-4 と裏の墨色面はピッタリ合う. 3 行目は別筆. 『新出』 p. 86.

七、唐 西州上烽文書 (86TAM389:22-4)

- 1 []
2] □合上烽 分五幡 餘有六人

3] □三幡□人別三幡，計當卅五日上烽，三
百九日不役。

4 []

86TAM389:22-5a

〔形態〕 前後・上下欠損。鞋のつま先部分に二次利用。

〔寸法〕 16.6×17.1cm

〔紙〕 紙色は chamois□。1cm/7~8本。中手の薄い方。中～中下質。漉きムラあり。

〔行数〕 6

〔裏面〕 389:22-5b 「符」の文字が連記された習字帳。

〔朱印〕 なし

〔備考〕 『新出』 p. 88.

九、唐殘状稿 (86TAM389:22-5a)

〔前缺〕

1 □ [] □□□ [

身

2] 為 患□□□□養，相即 [

3] 南平城養，括阿姨師去。今 [

4] □時將白練五匹， = 著寺 [

其

5] 其武威元有漢婢， [

6 []

※4行目 = : 人偏 + 「鄭」

【文書情報】

・中国の故宮博物院に、敦煌・トゥルファン文書が所蔵されていることは、あまり知られていない。ただ既に施安昌「故宮蔵有関韃靼的敦煌酒賬初探」『故宮博物院院刊』200-3（同『善本碑帖論集』紫禁城出版社，2002，pp.338-342）により，同院所蔵の帰義軍時代に属す酒帳が紹介されている。このほか，書簡，願文，社司転帖，財産分配帳などが，所蔵されていることが，王素氏により報告されている（同「故宮博物院蔵敦煌吐魯番文献述評」『西域敦煌出土文献研究』學術研討会論文集，人民大学国学院，pp.42-44）。王素氏の調査によれば，多くは敦煌文書であるが，財産分配帳はトゥルファン出土文書の可能性が高いという。